

大石 衡聴（言語学）

再分析処理における一時的構造曖昧性の解消過程について

— 多重情報間の競合の可能性 —

本論文は、人間の「言語理解」の一側面である「文処理」を研究の対象としている。特に、最初の処理段階（これを「初分析」と呼ぶ）において誤った分析を行ったために「解釈のやり直し」を必要とする「再分析処理過程」のメカニズムの解明に貢献することが研究目的とされている。

第 2 章および第 3 章では先行研究の主張の妥当性を検証するための実験結果が報告された。まず第 2 章では再分析処理における曖昧性解消にあたって有用な非統語的情報がない場合の処理の選好性について観察し、その結果をもとに「最小の最大投射原則（MMPP）」という統語的処理原則が提唱された。さらに、先行研究で提唱されていた構造保持原則よりも MMPP の方が経験的に妥当であることを示す実証的データが報告された。次いで第 3 章では、まず再分析を要求する要素の意味役割情報に常に優先的に利用されるという先行研究の主張が妥当ではないことを示す実証的データが報告された。さらに、韻律境界情報が初分析処理段階から一時的構造曖昧性の解消に利用されていることを示す経験的証拠が提示され、「韻律境界情報は再分析処理段階で初めて曖昧性解消に利用される」という先行研究の主張が必ずしも妥当ではないことが示唆された。

第 4 章では、再分析処理過程で得られた解釈の語用論的妥当性の低さが再分析処理全体の負荷に即座に影響を及ぼすことを示す経験的証拠が提示され、文処理装置が再分析処理の際に解釈のやり直しのみならず、得られた解釈の語用論的妥当性の算定までも即座に行っていることが示された。

以上の研究成果をもとに、本論文では再分析処理過程が限定的並列処理であると仮定する「多重情報間の競合モデル」が提唱された。この競合モデルによって先行研究および本研究の実験結果を整合的に説明できることが示された。さらに第 5 章では、韻律境界情報と統語的情報とが競合し、2 つの解釈候補間で語用論的妥当性に差がある場合とない場合とで文処理装置のパフォーマンスに違いが生じることを示す経験的証拠が提示され、競合モデルの主張が経験的に妥当であることが示された。

従来の文処理研究では初分析処理過程のみを考究の対象として文処理過程を説明しようと試みられていたため、文処理の全容を明らかにするには不十分な点があった。本論文では再分析処理における一時的構造曖昧性の解消過程に着目し、再分析処理過程を説明するためのモデルが提唱された。このことにより、初分析処理と再分析処理との間の共通点あるいは相違点について検討することが可能となった。その意味で本論文は、人間の文処理という認知的プロセスを解明するための研究に新たな方向性を加えるものとなったと言える。よって、本調査委員会 は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。